

記する。小澤氏の方式は漢字表記により近い形で、イリンチン氏の場合は文語モンゴル語表記により近い形とでも言えるかもしれない(もっとも、「子」の意を表すこの語の文語形には、*kuu* と *kobegün* があって、小澤氏は前者を、イリンチン氏は後者を採用したというだけの事だとも言えるかもしれない)。

その他、接尾辭 *suffix* についても、兩者の相違が際立つ場合がある。副動詞語尾の「阿速」(額速) (*asu* ~ *esu*)、巴速(別速) (*basu* ~ *besü*) [converbum conditionale] を表記する際、イリンチン氏は、一様に *-basu* ~ *besü* と寫し、小澤氏は *-basu* 系と *-basu* 系を嚴格に使い分ける。t と d の使い分けの点でも相違する場合が多い。このように、はからずも時を同じくして發表された二つのウイグル式モンゴル文字還原『秘史』は、それぞれの個性を主張して存在している。先述したように、專家の詳細な検討を望むのは、この故である。

最後に、著者および讀者諸賢に、この一文が同書のいわば本筋でないテーマにこだわる、しかも不十分な紹介の域を出ないものになった事をお詫びし、著者の斯學への寄與のますます豊かならんことを祈りつつ、また私たち後學にいいよ大きな學恩を今後も變わらず賜るようお願いしつつ筆を擱く。

一九八七年八月 呼和浩特 內蒙古大學出版社

A五判 二八七頁 二・八五元

Regat Kasaba

The Ottoman Empire and the World Economy; The Nineteenth Century

岡野内 正

一

普通の人權なる概念を生み出し、それを支える生産力を手中に全世界を包攝せんとする近代西洋。これに對する東洋は、無主體的な停滯のもとにあり、ひたすら西洋化、近代化を待ち望まねばならぬ存在でしかないのであらうか。非西歐的なものの中にも普遍的なものを見いだし、西洋世界との連關におけるその歴史的展開の延長上に、人權保障の實現を主體的に展望することはできないのであらうか。

西洋的な文脈での普通的人權というもののイデオロギー性(人權の内容の人種的、民族的、國民的、階級的な限定)を強烈に意識し、同時にイデオロギー批判のもと實踐的意義を自覺して人權保障の普遍的實現の經路を歴史的に展望するかにみえるイマニエール・ウォラーステインらの世界システム論⁽¹⁾が、多かれ少なかれ獨裁的な政治體制下にあるラテン・アメリカやアフリカ諸國のみならずトルコの研究者をも引きつけたのは、その理論構成が、上のような問いに答える方向性を示すものであるからのように思われる。

ウォラーステイン編集の雑誌レビューは、創刊號から若手トルコ人研究者によるオスマン帝國史批判の論文を掲載する。翌年のアナ

ール派の影響に關する特集號には、オスマン史研究の領域について、大家ハリール・イナルジクが登場し、その翌年にはウォラーステイン自身による問題提起的な小論文を配したオスマン史特集⁽⁴⁾が組まれており、以後八〇年代に入つて、この方向での研究が陸續と現れるにいたる。八七年刊行のシェブクト・バムクの著作に續く本書は、一九世紀オスマン帝國經濟史研究におけるこの方向での若干研究者による最近の成果である。

貿易および投資に關する各國統計資料の體系的な整理加工に重點を置くぐれて經濟史的なバムクの著作に比べ、本書はより社會史的である。一次資料としては、イギリス公文書館の未刊行文書、議會報告、イズミル考古學博物館蔵のイズミルのシャリーフ法廷記録が用いられているが、資料をして語らしめるといった類の緻密な分析、網羅的な文獻探索を期待してはいけない。先行諸研究の成果に依據し、必要に応じて斷片的な一次資料をも用いながら、むしろ社會全體の變化について大膽な圖式を提起するというスタイルが本書の特徴である。この意味で、本書はきわめて圖式的、かつ論争的である。

二

本書は、次のような構成となっている。

第一章 序

第二章 二つの世界から一つへ…オスマン帝國と資本主義世界

經濟

第三章 編入以後（一八一五～一八七六年）

第四章 周邊部の成長…アナトリア西部（一八四〇～一八七六年）

第五章 大不況とその後

第六章 結論

第一章は、著者の圖式の簡單かつ明瞭な提示である。著者は、これまで「ほとんどのオスマン史専門家」がとってきた帝國最後の一世紀についての圖式——「軍事的敗北、經濟的荒廢、政治的愚行の結果に、破局と全面的崩壊をむかえる。と同時に、行政組織、教育制度、運輸・通信網の改善に向かう重要な動向が定着する。」（一ページ）——を次の三點で批判する。

第一に、古典的制度の全面的衰退と同時に進行する、制度的部分的近代化を、統一的に説明できない。さらに近年の研究で明らかにされてきたような、經濟的な繁榮の兆候との整合性に至ってはなおさらである。第二に、ヨーロッパ諸勢力の影響の評価が、あいまいである。これは對外關係が専ら外交文書に依據する外交分析として扱われ、政治的、文化的、經濟的な側面が總合的に分析されなかったためである。第三に、中央政府の側からみた、國家中心の歴史となっている。これは、帝國の官僚機構によつて蓄積された、いまだ手付かずのものも多い膨大な政府文書を資料とする斷片的な研究が續けられてきたためであり、より廣範な、社會史的な資料をも用いた、統一的なテーマにもとづく研究が行われてこなかったためである。

それでは、これら三つの問題點——舊來の圖式の論理的な不整合、あいまいさ、一面性——を克服する圖式とは何か。オスマン帝國の

資本主義世界經濟への編入に伴う社會變化の諸側面として、統一的に把握することである、と著者は言う。ここで「資本主義世界經濟」の概念について著者は、ウォラストン及びホブキンスの著書の参照を求めているが、同時に、著者自身によっても、キー・タームの説明の形で「一般理論的歴史的説明」がなされている。

それによると、一六世紀までのオスマン帝國は、世界帝國（ウォラストン）、世襲制（ウェバー）、貢納再配分的統合（ポランニー）によって特徴づけられる、歴史分析上の一單位をなしており、これを古典時代と呼ぶ。これに對し、一五、一六世紀に北西ヨーロッパを中心として登場する經濟關係の獨自なシステムは、世界帝國とは異なり多様な國家機構を内包したままで、資本家的合理性を原則として組織される單一の分業の存在によって特徴づけられるものである。これを資本主義世界經濟と呼ぶ。生産過程の統合のされ方によって異なる収益配分様式の階層的差異によってこれは、中心、周邊、半周邊の三つの部分に分けられる。さらにこのシステムは、擴張期と收縮期とを長期的に循環（コンドラチェフ）させながら、以後四世紀にわたって外部世界を編入しつつ擴大してきている。資本主義世界經濟への編入（生産過程がリンクされ、國家間システムに統合される）から周邊化（中心および半周邊への從屬）が必然的に結果するのではない。編入される地域の地理的、自然的位置、歴史的狀況、編入時の資本主義世界經濟の局面等の諸要因によって規定される、編入された地域における様々な社會集團の興亡、相互鬭争を内容とする社會變容の結果として、システム内部の位置付けが決まってくる。オスマン帝國の場合、資本主義世界經濟への編入とその他の周邊化とは、時期的に異なる二つのプロセスとし

てはつきりと區別されうる、というのである。

章別構成の意圖はすでに明らかであろう。第二章はオスマン帝國の資本主義世界經濟への編入の過程、第三章は編入以後の周邊化の過程、第四章はその地域社會サイドからの検証、第五章は周邊化後の變化を、それぞれ扱う。一般的な形ではひとまず明確にされた著者の圖式は、オスマン帝國史の具體的な史實によってどのような肉付けを與えられ、その妥當性が主張されるのであろうか。

三

本書は一九世紀を對象としている。しかし、前述の著者の圖式を展開しようとする場合、一六世紀以降のオスマン帝國史を資本主義世界經濟との關係でどう捉えるか、という課題がただちに生じる。編入が一六世紀に開始されるものであるとすれば、一九世紀のみを對象とすることは許されないであろうからである。第二章は、編入についての前述の基準（生産過程のリンク、國家間システムへの統合）に照らして一六世紀以降一九世紀までの時期について検討し、編入の時期を確定することを課題としている。

生まれたばかりの資本主義世界經濟と古典時代オスマン帝國との接觸が始まる一六世紀については、これまでの諸研究によって帝國內の人口増加、アメリカ銀の流入によるインフレ、オスマン帝國からヨーロッパへの小麦輸出の増大、中央政府官僚による直接的統制外の商業的農業（一部官僚層による密貿易、バルカン農民による餘剩生産物販賣）の展開等が報告されている。著者は、資本主義世界經濟との接觸に起因するオスマン帝國內のこのような變化について、それらは、古典時代の有力者・農民關係を強化するのみの一時

的、限定的な現象であり、長期的な編入の開始を告げる構造的變化を示すものではない、とする。

續く一七世紀から一八世紀半ばには、資本主義經濟の收縮期における穀物價格下落に起因して對ヨーロッパ貿易が縮小する。この時期の帝國の社會變容として、農業、工業兩部門における徵稅請負制の導入、アーヤン層の擡頭、火器で武裝した傭兵の登場等が概觀され、生産への支配、行政的、暴力的諸手段への支配の觀點から、中央政府支配の弱화가結論される。領土的擴張が限界に達し、世界貿易の流れが地中海から大西洋へシフトする、という外的狀況にあつてオスマン帝國が直面したこれらの内的諸困難のいくつかは、むしろ資本主義世界經濟から排除されたために生じた、というのである。

一八世紀半ば―一八一五年の時期における變化としてヨーロッパ側については、穀物價格の上昇、新興工業國の商品需要の増大、戰爭と革命の連續による密輸と投機的利得獲得の機會の増大の三點が挙げられる。そして、オスマン帝國側については次のような分析が行われる。

まず、事實として一八世紀半ばに始まる對ヨーロッパ輸出の増大（バルカン半島、西部アナトリアからの穀物、家畜、綿花）、その擔い手としての移民による非ムスリム系商人ネットワークの形成（バルカン半島でのギリシヤ人等）、財政困難からの惡鑄による貨幣制度の混亂による兩替、金貨し業の繁榮が指摘される。次に、生産過程における根底的な變化として、チフトリキ農業の形成が挙げられる。その特色は、チフトリキ所有者が事實上の土地所有權を持ち、したがつてさしあたり私的利害に動機づけられていること、チ

フトリキ所有者による監督のもとで生産過程が再編され、商品作物が生産されることが多かったことであるという。さらに勞働の側からみれば、古典時代の自由と保護とが制度的に保障された農民の地位から、良くて刈り分け小作人、一般的には借金で首の回らない小作人ないし追い立てをくつた賃金勞働者の地位への變化であるとする。近年批判されてきているチフトリキ―大農場制説については、これを退け、むしろ大農場經營への發展が見られない理由として、チフトリキ所有者を規制する金融業者の存在に注目している。農場經營への長期的投資よりはむしろ自己の財政狀況の改善のみを求め、不在地主化したチフトリキ所有者による農民搾取の強化がバルカンにおいてはキリスト教徒農民の反感を呼び起こし、一九世紀の政府支配の回復を容易にし、再び生産における小農民の復興へ道を開いた、というのである。

こうして生産過程の深みから、この時期に擡頭してくる、對歐貿易を擔う非ムスリム仲介業者、金融業者の存在がクローズアップされてくる。資本主義世界經濟への編入による最大の受益者であるこの層は、密貿易を可能とする中央政府の弱體化を前提として存在すると同時に、自らの基盤である帝國の解體を回避することに利害關係を持つ。かねてより議論のあるアーヤン層による同盟誓約（一八〇八年）は、この利害關係を示すものと評價される。そして、この點で同様だったのが、まずは武力によって國家間システムへの統合を迫り（一七三九年ベオグラード條約起點）、ついでシステム内の勢力均衡のために帝國の維持を圖つたヨーロッパ諸國政府である。逆に、オスマン帝國政府が自己保存のためにヨーロッパ諸國に依存し始めた時、國家間システムへの統合は完了したことになる。

編入過程としての一八世紀半ば～一八一五年（ナポレオン戦争終了）という時期は、以上のような基準に照らして設定されている。

四

ナポレオン戦争時にイギリス商品の對ヨーロッパ輸出の唯一の中繼地となったこと、より一般的には周邊部としてのアジアとの中間にあるという地理的位置という理由から、編入の完了する一九世紀初頭の段階では、オスマン帝國はロシアのように、半周邊の地位を占めることが可能であったという。しかるに、一八七〇年代には、オスマン帝國は明らかに周邊に位置づけられてしまっている。この變化は何故か。著者は三つの決定要因を區別する。すなわち、世界經濟の動向、オスマン帝國の政治構造、地域ネットワークの對應である。周邊化の過程は、これら三つのレベルで分析される。

第三章の前半を占める、バックス・ブリタニカ及びタンズィマートに関するスタンダードな著作にもとづく世界經濟及びオスマン國家の分析については、これ以上紹介する必要はないであろう。著者の分析の主眼は、第三章の後半及び第四章で展開される地域ネットワークの分析にある。一次資料が用いられるのも、専らこの部分である。

ここで強調されるのは、周邊化過程における地域ネットワークの究極的決定要因としての地位である。すなわち、世界經濟のインパクトにせよ、中央政府の政策にせよ、地域ネットワークの對應によって、その具體的な効果は變形されうる。地域レベルでの具體的な對應における主體性こそが問われねばならない、というわけである。したがって、地域ネットワーク分析の視角は、中央政府の政策

執行にあたる地方官僚、資本主義世界經濟の中心部の利益を追求する外國人居住者（資本家、政府代表）、現地仲介業者（商人、徴税請負人、金貸し業者）、農民の四者をネットワークの擔い手として析出し、さらにこの中から周邊化への主體的な要因を探らうとするものになる。

第三章の後半部分では、まず貿易の伸び、イズミル港等の後背地での商品作物生産、納税における貢獻度の點から、西部アナトリアが周邊化過程の典型とされ、分析對象として設定される。ついで生産過程の分析に移り、先行研究の成果をイギリス領事報告等で補足しつつ、この地域における人口密度の低さからくる労働力不足に規定されて、一九世紀を通じて小農民（四～五人の労働力からなる家族が二頭の牛と一時的な外部労働力の補助によって耕作しうる八ヘクタール以下の農地を保有）生産が優勢であったことが確認される。アーヤーン層は一九世紀初頭までの全盛期においてさえも主として所有地を細分して小農民に貸し出し、農業生産組織の實質を變えることはできなかった。アーヤーン層の没落（一八二八年對露戦争（割期）後、夫役労働が禁止され、大農場の耕作放棄が報告される状況下で、究極的には小農民が、一八四〇年代以降の世界經濟の擴張局面と自由貿易體制の中で輸出向け農産物生産に對應することになったというのである。

この様に地域ネットワークの基底ともいうべき生産過程を押さえたうえで、まず稅收の増加を第一義的に追求する中央政府の政策（稅制改革、綿花等特定商品生産奨励策、労働力不足解消のためのバルカン難民の定住政策等）とその執行過程が検討される。主としてイギリス領事報告、非ムスリム住民の法的平等に關する法改革の

執行については特にイズミルのシャリーア法廷記録に依據して、一九世紀後半の中央政府の政策は、アナトリア農業の資本主義世界經濟への統合を進める方向性を持つものではあったが、地方においては有効な執行手段を缺いていた、と結論される。

次に外國人居住者の役割が、やはりイギリス側資料によつて検討され、一八四三年に特許狀を得て一八四七年に破産したスミルナ商業銀行の顛末、勞働力不足によつて挫折した農場開發、一八六六年に開通して以後事業を運輸部門に限定する鐵道會社等の事例から、外國領事の後ろだてをもつ外國人資本家も、現地仲介業者と競合して地域ネットワークに食い込むことは不可能であつたと結論される。

こうして、地域ネットワークの支配者として農民との接觸を獨占する仲介業者が、分析の焦點となる。仲介業者は、十分の一税の徵收、生産物（現物納の場合の十分の一税、もしくは餘剰生産物）の輸送、貨幣貸し付けの三つの経路で農民と接觸するが、資金力のあるものはこの三機能を兼ねており、しばしばイスタンブルの金融業者と結び附いていた。やはりイギリス側資料に依據しつつ、このような仲介業者にとっては、長期的な投資を必要としリスクの大きい生産や商業への資本投下よりは、オスマン帝國の行政的、財政的混亂（徵稅請負、貨幣、金融政策）を前提する投機、兩替、高利貸付への資本投下のほうが有利なものであった、とする。それにもかかわらず、編入後の地域ネットワークが周辺化の方向で再編されたのは何故か。

第四章は、この問いに答えることを課題としている。まず一八四〇～一八七六年について斷片的なイギリス側資料から作成された質

易及び生産統計（附録に七表を收録）によつて、輸出超過によるイズミル地方への富の蓄積、輸出の伸びをリードした一八五〇～一八六〇年代における特定農産物（バロニア、アカネ、干しぶどう、阿片、棉花）の價格上昇、一八四五～一八七六年の時期のイズミル地方の農業總生産額は八倍に、一人當りでは六倍に成長したこと等が指摘される。次に、こうして蓄積された富が流出しうる経路について検討し、投資収益送金は鐵道會社のみで極めて僅かであり、輸入代金支拂は相對的には増加しても輸出の伸びには及ばず、中央政府への租稅支拂は過大評價されている上、生産の伸びには及ばないとする。さらにイズミル後背地農村において生活水準の目立った向上が報告されていないことから、農村に比較して租稅負擔が輕く、商業活動の著しい集中が見られる海岸都市、とりわけイズミルに富が集中した、とする。この富の分配にあずかつた集團として、都市近郊の小農民、ラクダによる輸送に従事する遊牧民、都市及び近郊の賃金勞働者があるが、最大の受益者は、非ムスリム仲介業者であるという。一八世紀末以降、移民によつて散在する内外の同宗派の業者との間に地域的、世界的ネットワークを持ち、戰略的な位置を占めてきたアルメニア人やギリシャ人業者等非ムスリムの富の巨大さが、イギリス領事法廷やイズミルのシャリーア法廷に残された遺言狀によつて確認される。これに對して、古典時代以來のヨーロッパ市場と無縁な商人層、弱體化した中央政府の後ろだてしかない地方政府官僚、そもそも非ムスリム仲介業者に依存してその地歩を築いたアーヤーン層等のムスリム・エリートは、この富の分配にあずかれず没落する。法廷記録から確認できるシャリーアの嚴格な適用による土地細分化、さらに職人層がヨーロッパ製品と競合する

織物業等へ歴史的に特化していたことも、ムスリムの没落要因として作用したという。以上のような分析から、編入後とりわけ一八五〇～一八六〇年代の資本主義世界経済の需要に對應する市場の作用こそが、保守派の中央・地方官僚による古典時代への復歸運動、外國人と改革派官僚による中央政府權力強化の動きを打ち破り、地域ネットワークの要の位置を占める非ムスリム仲介業者に利得の機会を與え、輸出向け農産物生産の方向に組織して周邊化を押し進める力となったことが結論される。

五

世界的な價格の低落傾向とイギリスの經濟的地位の低落傾向によって特徴づけられるいわゆる一九世紀末大不況期（一八七三～一八九六年）は、アブドゥルハミト二世の統治期（一八七六～一九〇八年）とはば重なり合う。第五章は、著者の圖式によって、周邊化が完了して以降のこの時期についての先行諸研究の成果を整理したものである。

著者は、共和國初期の歴史家によるこの時期の停滯性を強調する所説、近年のこの時期への再評價（政府収入増加、官僚機構整備、教育改革、經濟發展、借款返済等の強調）の兩説を一面的とする。

そして、列強間の對立（中心と半周邊との闘争）こそオスマン帝國の形式的獨立を保持させ、青年トルコヤムスタファ・ケマルの社會運動が生じる餘地を與えたものであることを強調する。さらにPDA（公債管理局）を通じる超國家的レベルでの金融資本の支配を強調し、PDAこそが大不況期の條件のもとで自らの官僚機構を通じて、時には生産者と組んで（タバコ專賣の場合）抵抗する仲介業者

を打ち負かし、これを排除して二〇世紀初頭のブーム再来にあたって國家官僚と新しいムスリム・ブルジョアジーの擡頭を準備した、としている。

第六章では、本書全體の結論が、通説批判の四つの論點としてまとめられている。

第一の論點は、トルコ共和國時代の社會における國家の異常な強大さを、オスマン帝國時代の遺産とみる考え方への批判である。著者は、古典時代の世界帝國としてのオスマン帝國と編入後の資本主義世界經濟内部の國家間システムの一部分としてのオスマン國家とを峻別する。共和國が受け繼いだ強大な國家は、一九世紀の編入、周邊化によって形成された資本主義世界經濟の所産であるというのである。

第二の論點は、一九世紀中葉の周邊化に決定的な役割を果たした非ムスリム仲介業者を、外國資本の手先＝買辦とみる考え方への批判である。地域ネットワークを代表する彼らは、利潤極大化を求める資本家として主體的に周邊化の擔い手となったのであり、その限りでは中心部資本家と對立することもあったのである。

第三の論點は、帝國末期と共和國時代初期の市民社會の弱さを、古典オスマン時代の末裔たる近東文化の特質とみる考え方への批判である。著者は、地域ネットワークに根ざした資本家である非ムスリム仲介業者こそが帝國を握り崩し、純粹の市民社會を發展させる擔い手であったとする。一八七〇年代以降の中央政府官僚と超國家的金融資本とによる地域ネットワークの直接把握、他方での非ムスリム仲介業者の孤立化こそが、市民社會展開の芽を潰したものとみるのであり、それは他ならぬ資本主義世界經濟の獨自の展開の所産

であるとする。

第四の論點は、ヨーロッパ經濟と接觸して以降のオスマン帝國が、ひたすら長期的な没落、解體の道を歩んだとみる考え方への批判である。著者は、一九世紀のオスマン帝國は、資本主義世界經濟における半周邊の位置に通じる可能性のある歴史的歧路に二度さしかかったとみる。第一は、一八〇〇年代であり、英佛對立の狀況のもとでの英の援助がその可能性を開くものであったが、現地仲介業者によってその實現は阻まれた。第二は、一八七〇年代であり、非ムスリム仲介業者による國家權力の獲得がその可能性を開くものであったが、その可能性は、超國家的金融資本と結ぶ中央政府官僚によって阻まれた。オスマン帝國の周邊化は、究極的には資本主義世界經濟の展開によって規定される社會諸集團間の鬭争によって決定されたというのである。

六

以上紹介してきたように、著者は、獨自の圖式にもとづいて一九世紀オスマン帝國史の史實を整理し、通説とは異なる歴史像を描いた。そこでは、オスマン帝國社會は、世界的なシステムを主體的に構成する部分として捉えられている。オスマン帝國史を彩る諸社會集團間の鬭争は、同時に世界システム内部の帝國の位置を決定する鬭争として捉え直されるのである。このような捉え方が、いわゆる東洋停滯論＝オリエンタリズムを免れるための優れた方法であることは言うまでもない。一九七七年以來のウォラストイン學派によるオスマン帝國史の見直しは、この方向を志向するものであったが、本書によって一應の到達點に達したと言える。しかしながら、

問題もなしとしない。

まず目につくのは、地域ネットワークの要として、一九世紀社會の方向を決定づけたとされる非ムスリム仲介業者を、市民社會の擔い手とする圖式である。これは魅力的なものである。けだし市民社會とは、人權保障ないし民主主義と密接に結び附いて、經濟、政治、思想の各レベルにわたる全體として近代西歐において構想されてきた概念だからである。しかしながら、本書においても、ウォラストイン自身によっても、具體的實證に耐えうるほどのこの概念の整理は見られない。この論點が、オスマン社會の主體性を強調する際の本書の核心とも言うべきものであるだけに、ウォラストイン學派によってなされていないこの概念の理論的整理をも含めて、いま少しく彼らの具體像が描かれる必要があるだろう。たとえばこれら仲介業者を、買辦ではなく資本家であると規定するのであれば、農業生産の擔い手とされる小農民との關係が明確にされ、周邊資本主義の發展と市民社會の關連が圖式化される必要がある。その上で、この地域の特殊性の十全な把握のためには、エタティズムのみならず、ナショナルイズムやイスラミズムとの關連、彼ら自身の宗教、イデオロギーの役割も問われる必要がある。

せっかくのシャリーア法廷記録も、この方向で十分に活用されているとはいいたい。この點では、「一次資料にもとづいた個別具體的な事例をもたぬままに議論」という永田雄三氏の批判が、依然としてあてはまる。とはいえ、このことは著者も十分に自覺しており、本書の意義も、作業假說的な全體像の提出に求めるべきであろう。

註

(1) このような性格を示すものとして、次の論文集を参照。

I・ウォーラーズテイン著、藤瀬浩司、日南田靜真他譯『資本主義世界經濟 Ⅰ・Ⅱ』名古屋大學出版會、一九八七年
(Immanuel Wallerstein, *The Capitalist World-Economy*, Cambridge University Press, 1979)

(2) Huri İslamoğlu and Çağlar Keyder, "Agenda for Ottoman History," *Review*, I, 1, Summer 1977, pp. 31—55.

(3) Halil İnalcık, "Impact of the *Annales* School on Ottoman Studies and New Findings," *Review*, I, 3/4, Winter/Spring 1978, pp. 69—96.

(4) Immanuel Wallerstein, "The Ottoman Empire and the Capitalist World-Economy: Some Questions for Research," *Review*, I, 3, Winter 1979, pp. 389—398, Huri İslamoğlu and Suraiya Faruqi, "Crop Patterns and Agricultural Production Trends in Sixteenth-Century Anatolia," *Ibid.*, pp. 401—436, Benjamin Braude, "International Competition and Domestic Cloth in the Ottoman Empire, 1500—1650: A Study in Underdevelopment," *Ibid.*, pp. 437—451.

(5) Şevket Pamuk, *The Ottoman Empire and European Capitalism, 1820—1913; Trade, investment and production*, Cambridge University Press, 1987.

(6) Vedat Eldem, *Osmanlı İmparatorluğun İktisadi*

Sartıları Hakkında Bir Tarih, Ankara: T. İş Bankası Kültür Yayınları, 1970, 2初版、1977 Donald Quataert, Şevket Pamuk の著作が挙げられている。

(7) この章は、*Review*, X, 5/6 (Supplement), Summer/Fall 1987 に初出の論文の書を直してある。

(8) 永田雄三「歴史のなるのフーヤン——一九世紀初頭への地方社會の繁榮——」『社會史研究』第七號、一九八六年十二月、一四四頁以下。

New York: State University of New York, 1988, 23cm, xii + 191pp.